

Marqués de Santillana の *Proverbios*

危機の時代における君主の鑑

瀧本佳容子

サンティリャーナ侯 (Marqués de Santillana, Íñigo López de Mendoza, 1398-1458, 以下 "Santillana") がカスティーリャ王フアン2世 (在 1406-54) の求めに応じて王太子エンリケ (1425-1474) への助言として書いた 100 の箴言から成る *Proverbios* (1437) を、内政危機と人文主義・ルネサンス精神の広がりという時代背景に関連づけて論じた。また、その形式や内容の先駆例を、カスティーリャ文学上の君主の鑑の系譜を中世半ばまで遡って指摘した。

1. Marqués de Santillana とその時代

15 世紀のカスティーリャ王国では 14 世紀後半のトラスタマラ朝成立に由来する権力闘争と内政不安が継続していたが、Santillana は軍人・政治家として動乱を冷静に生き抜いて家門を繁栄させた。同時に人文主義・ルネサンスがイタリアからカスティーリャへもたらされる契機をつくり、15 世紀の最も重要な文人の一人になった。多彩な主題の詩や散文の俗語論を著し、文学・芸術のパトロンおよび蔵書家としても重要な足跡を残した。

Santillana の教養形成にとって重要だったのはアラゴン王国との関係である。13 世紀末からシチリア、15 世紀半ばからナポリも領有したアラゴン宮廷に Santillana は 10 代の頃から出仕し、アルフォンソ 5 世 (在 1416-58)、詩論 *Arte de trovar* (1433c.) などを著した E. デ・ビリェーナ (1384c.-1434) などの学芸を愛し奨励した宮廷人たちと親しんだ。一方のカスティーリャ王国では、政務能力は持ち合わせないが文芸追求には熱心なフアン 2 世のもと、*Cancionero de Baena* (1430c.) 編纂などによって、詩作が宮廷人の実践すべき教養の一つだという認識が定着した。詩人たちは詩を "gaya sciencia" (華麗なる技法) と呼んで理論化にも努めた。こうした趨勢のもと Santillana は *Proverbios* 執筆の約 10 年後に、カスティーリャ文学史上最も重要な俗語論の一つ *Prohemio e carta* (1445-49) で、カスティーリャ詩の歴史を創出し古典古代からの詩の伝統に接続しようと試みた。さらに俯瞰すると、パーゼル公会議においてブルゴス司教 A. de カルタヘナ (1384-1456) が由緒の古さを根拠にカスティーリャ王国の優位を主張するなど、15 世紀は歴史や言語に新しい政治的意味が与えられた時代だった。これは危機の中にある社会に特有の需要によるものだった。即ち、言語の使い手たちがより高レベルの抽象性やより優れた精緻さで新しい現実を表現する欲求にかられ、言語にはより普遍的であることが求められたのである (Cano Aguilar, 1988)。

2. *Proverbios*

Proverbios は、序文 (散文)、100 の箴言 (8 音節を基調とする韻文)、箴言で言及した人物の解説 (散文) から成る、理想的君主像を示した書である。箴言の源泉は、聖書、および、古典古代 (V. マクシムスなど) から同時代 (L. ブルーニなど) までの様々な作家である。15~16 世紀の写本 27 と刊本 20 が現存する、成立直後から最も大きな成功をおさめた中世カスティーリャ文学作品の一つである。フアン 2 世に献上したはずの写本は同定されておらず、サラマンカ大学所蔵 MSS. 2.655 が最良写本である。これは Santillana が従甥ゴメス・マンリケ (1412-90) のために他の詩も併せて制作させた *Cancionero el Marqués de Santillana* である。このように Santillana は自作の普及に熱心で、自選集を編み、俗語と詩に関する自説を展開した序文を付して、様々な人々に献呈した。

Proverbios 序文は「すべての芸術、学問、思索は物事の目的なのです」というアリストテレス『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 1 章の引用から始まり、フアン 2 世の要請に応じソロモンの『箴言』に倣って本書を著すという執筆の経緯、そして、息子は他の何人からよりもまずその父からの助言を受けるべきだという主張が続く。ここでは、統治者には知・学問、そして父からの教えが必要であるという *Proverbios* を貫く思想が示されている。続いて Santillana は「学問は騎士の掌中にある槍の切っ先を鈍らせることも剣をなまらせることもありません」と論しつつ、君主の鑑・統治論・政治論・法律書・軍事論・年代記・宗教書の読書を推奨する。さらに、自分の詩に対する批判を予想し、Raimon Vidal de Besaduc (1196c.-1252c.)、Jofre de Foixà (†1300c.)、Berenguer d'Anoia (fl. 1300c.) を根拠に挙げつつ予想した批判を反駁する。また、古代ローマからシードなどを経てエンリケに至る統治者の連続性を主張するという歴史観も提示する。統治者にとっての学問の必要性、および、理念と知性の父系

継承の重要性は、13世紀にアルフォンソ10世（在1252-84）が示したものであった。また、詩人たる自負の表明、および、古代から同時代までの連続性の創出・提示は、Santillanaの他の論考でも主張されている。

100の箴言は13のトピックに分けられ、各に不均衡な数（2から16）の箴言が割り振られている。トピックは、枢要徳である知恵（愛と畏れ、分別と知恵）、正義（正義、忍耐と誠実な正しさ）、節制（節制、貞操）、勇気（勇気）、次いで、道徳指南（自由と率直さ、真実、強欲の自制、嫉妬、父への敬意、老年）という順で配列され、最終100番は結語である。言及された人物についての解説は不規則に付されている。例えば「愛と畏れについて」の箴言1から12では、3で言及されるカエサルと9で言及されるアハシュエロスに関する解説がパラテキストとして併記されている。韻文に散文の註釈を付す形式は、ユダヤ教徒 Sem Tob de Carrión（13世紀末-1369c.）がペドロ1世（在1350-69）のために著した *Proverbios morales*（または *Consejos y documentos al Rey don Pedro*）序文の「註釈者は韻文に込められた意味を理解し得ない者を助ける」、「韻文は散文よりも良く記憶される」に影響されたと指摘されている（Gómez Redondo, 2020）。Santillanaも愛読した同書は、イスラーム圏が中世イベリアに伝えた古代ギリシアの箴言に基づいて13世紀からカスティーリャ語で書かれるようになった、知恵・助言の書や君主の鑑などの「知恵文学」の伝統に位置づけられる。Santillana自身は *Proverbios* 序文で、人物に註釈をつけたのは詩の解釈を助けるため、また、エンリケが若いためだと述べている。Santillanaはカスティーリャ語の知恵文学の伝統を意識しつつ人文主義の影響のもと *Proverbios* を着想・執筆したのだと言える。

3. 結語

文芸と学問を政治・社会のエリート層に必須のものだと主張しつつ、自らが属する政治的共同体の独立維持と利益を追求した Santillana はルネサンス精神を体現した人物だった。さらに、*Proverbios* を他の詩や論考とともに冊子にまとめ様々な知友に献じたことから、Santillana が *Proverbios* を、他者に伝え広めるべき自らの理想の総体の一部だと見なしたのだと言える。また、*Proverbios* が刊本として人気を博した理由の一つは、当時好まれたアンソロジーや人物列伝として受容されたからだとも言えよう。15世紀の詩人たちが詩を「華麗なる技法」と呼んだのは、自律的な知の一分野として認めることによって詩に社会的身分を与える試みだった（Kohut, 1978）。文学の理論化が社会的関係確立のために企図されるのは明らかだが、Santillanaの意図はカスティーリャの文化および貴族にアイデンティティを与えることにあり、同時に Santillana は、貴族は自らの階級と国の威信の象徴として詩を追求してもよいという信念も宣言したのであった（Weiss, 2005）。

主要引用・参考文献

- Santillana, Marqués de (2003), *Poesías completas*, edición de Maxim P. A. M. Kerkhof y Ángel Gómez Moreno, Madrid, Castalia.
- Bustos, Álvaro (2024), "El Marqués de Santillana ante la tradición cancioneril: linaje y cortesía", en *Anuario de Estudios Medievales*, 54 (1), pp. 1-19.
- Cano Aguilar, Rafael (coord.) (2008: 2a. ed.), *Historia de la lengua española*, Barcelona, Ariel.
- Gómez Moreno, Ángel (2001), "Don Íñigo López de Mendoza, sus libros y su empresa cultural", en *El Marqués de Santillana. 1398-1458. Los albores de la España Moderna: el Humanismo*, Hondarribia, Editorial Nerea, pp. 59-81.
- Gómez Redondo, Fernando (2020), *Historia de la poesía medieval castellana. Tomo I: La trama de las materias*, Madrid, Cátedra.
- Kohut, Karl (1978), "La posición de la Literatura en los sistemas científicos del siglo XV", en *Iberoromania*, Nº. 7, pp. 67-87.
- Lapesa, Rafael (1967), "Los Proverbios de Santillana. Contribución al estudio de sus fuentes", en *De la Edad Media a nuestros días. Estudios de historia literaria*, Madrid, Gredos, pp. 95-111.
- Nogales Rincón, David (2006), "Los espejos de príncipes en Castilla (siglos XIII-XV): un modelo literario de la realeza bajomedieval", en *Medievalismo: Revista de la Sociedad Española de Estudios Medievales*, No. 16, pp. 9-40.
- Pérez Priego, Miguel Ángel (2002), "Marqués de Santillana", en *Diccionario filológico de literatura medieval española. Textos y transmisión*, Madrid, Castalia, pp. 843-853.
- Round, Nicholas G. (1979), "Exemplary ethics: towards a reassessment of Santillana's *Proverbios*", en *Belfast Spanish and Portuguese Papers*, The Queen's University of Belfast, pp. 217-236.
- Schiff, Mario (1905), *La bibliothèque du Marquis de Santillane*, Paris, Librairie Émile Bouillon (réimpression de 2013, Lexington, ULAN).
- Weiss, Julian (2005), "Literary Theory and Polemic in Castile, c. 1200- c. 1500", in *The Cambridge History of Literary Criticism, Volume 2, The Middle Ages*, edited by Alastair Minnis and Ian Johnson, Cambridge, pp. 496-532.